

平成 25 年度 自己評価表

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がい児一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実 2 自立を目指したよりよい社会参加と豊かな心の育成 3 豊かな自己表現力の向上</p>
---------------------------	---	----------------------	---

評価項目		年 度 当 初			評 価 結 果 ( 10 ) 月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
確かな学力の定着を図る学習指導の充実	(教務) 個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	教科等の個別の年間指導計画を作成し、単元ごとに評価規準と評価・指導の反省欄を設けて指導の充実を図っている。	全教員が、個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用して、授業を充実させている。	単元ごとに評価と実践の見直しを行うように教務部が呼びかけ、定期的に確認を行う。	日々の授業や単元においては評価・改善をしているが、指導計画表には単元ごとの入力にならずまとめ入力になる傾向がある。	C	「実施状況と反省・課題」欄の記入が、次の単元に生きる振り返りになったり、次年度の参考になったりするように、行った支援の成果や課題を記入するように周知する。
	(研究) 聴覚障がい教育の専門的な研修として、日々の指導に関する研修と手話力の向上を図るための研修を計画する。	聴覚障がい教育は専門性が必要とされるにも関わらず職員員の異動により聾学校に長く勤務する職員が少なくはなっている。それぞれの職員が今まで培ったそれぞれの専門性を聴覚障がい教育の中でさらに活かすためにも、専門的な研修を行うことが必要とされている。	職員研修の充実を図る。	手話力の向上のための研修会を定期的実施するとともに、専門性を高める研修会を職員のニーズから抽出し随時実施する。	職員の手話力の向上のため定期的に研修会を実施したが、参加者は固定化し、少なかった。	C	研修会の内容についてや、対象の職員について検討をする。職員の手話力に応じてグループ分けを行う方法も今後検討していく。
	(研究) 幼児・児童・生徒の基礎学力の定着を図るため、ことば、かず、国語科、算数・数学科に焦点を絞って校内の研究を進める。	担任や担当がそれぞれ工夫して日々の学習指導に当たっているが、学力の向上、基礎学力の定着や家庭学習の習慣等がなかなか身に付かない状況にある。	基礎学力の向上及び定着を図る。	幼児・児童・生徒のつまづきを記録し、次時の授業の支援に活かすと共に、自己評価表を使って学習意欲の向上につなげるような指導を行いながら日々の授業改善に向けて検討していく。	学習における配慮事項をまとめたリ、つまづきの記録を取り、支援の方法の検討を定期的に行った。	B	グループ内で検討したことを教科にも生かすことができるようにしていく。
自立を目指したよりよい社会参加と豊かな心の育成	(総務部) ①学校公開を通じた啓発活動を推進する。 ②地域の保育所・幼稚園に向けて啓発活動を行う。	①学校公開では、学校関係以外の来校も増えつつある。 ②東部地区の保育所・幼稚園の啓発活動は計画通りに進み、昨年度である程度の区切りがついている。	学校公開、保育所・幼稚園への啓発活動、『とりろうだより』などの取り組みで、本校の教育を地域等に広げる為、情報をより発信していく。	①学校公開の週間に多く来ていただけるよう、案内の内容や方法を工夫する。 ②中部地区の保育所・幼稚園への啓発活動を行う。 ③『とりろうだより』をより充実したものにする。	倉吉市の全私立保育所・幼稚園への訪問を実施したり、教職員の研究についても紹介した「とりろうだより」を発行するなどして啓発活動、情報発信を行った。学校公開については来校者が増したが、アンケート回収率に課題が残る。	B	学校周辺の地域にも案内を配り、学校公開について幅広く連絡することで来校者数を増やし、より多くの意見が反映されるようにする。また、外掲示版を1か月に1回は交換し、有効活用する。
	(生活安全部) 学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を基に心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活についての理解を深め、自主的に健康で安全な生活習慣が身につくように学習の機会を設け、日常的に幼児・児童・生徒の実態に応じた指導を行う。	学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱としてその内容を一過性の行事として行うのではなく事前・事後学習を学活や道徳などの年間指導計画に位置付け、計画的に学習を行えるように準備している。	心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活についての理解を深め、自主的に健康で安全な生活習慣が身につくよう日常的・継続的に指導を行っている。	学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組事項を12項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して課題を明確にしてその後の取組に活かせるようにする。	計画に沿って重点事項に取り組んでいる。日目の歯みがきや昼休みの外遊びなどに自主性がみられる。火災・交通安全などの避難訓練は教員の指示に従って安全を心掛けているが、危険への対処を具体的に考えるには至らない生徒もいる。	B	健康や安全に関することを学ぶことの大切さや意義が理解できるような指導を心がける。危険への対処法を個々の実態に合わせてわかりやすく説明し、自ら考える時間を設定する。
	(研究) 幼児・児童・生徒の自己理解・自己管理能力を高めるために、キャリア発達の視点により校内研究を進める。	学部ごとでの子どもたちの自己理解・自己管理能力に関する指導は今までも行われていたものの、本校在籍中(乳幼児～高等部)を見越した系統的な指導を行うことが難しい状況にある。	幼児・児童・生徒の自己理解・自己管理能力の育成を図る。	自立活動の時間などの中でキャリア発達支援段階表を活用して目標を設定し、幼児・児童・生徒の自己理解・自己管理能力を高めるような授業実践について検討していく。	自立活動や教育相談活動等での指導に絞り、授業実践を行い、自己理解・自己管理能力の向上について研究した。段階表を活用することができてきた。	B	段階表だけでなく、全体計画も意識し、個別的教育新計画との関連付けを行っていく。
	(進路) 家の手伝いや学級で割り当てられた係、当番の仕事、職場体験・現場体験学習に積極的に取り組ませる。	集団生活におけるルールを守ること、職場における先輩への接し方等、社会性がまだまだ不足している幼児・児童・生徒がみられる。また、鳥取県における高卒者の離職状況が、就職3年後に40%を超える状況になっており、全国平均を上回っている。	すべての幼児・児童・生徒が、積極的に取り組む。	家の手伝いや係や当番の仕事をはっきりと決め、それに組み込ませる。また、体験実習の事前指導・巡回指導等で実習の状況を把握し、不十分な点はその都度指導していく。	大部分の幼児・児童・生徒は、係や当番の仕事・実習等に責任を持って取り組むことができるようになってきているが、まだ社会性等が未熟な生徒も見られる。	B	いろいろな係や当番の仕事および様々な事業所での実習経験を、今後も積み重ねていく必要がある。
豊かな自己表現力の向上	(研究) 幼児・児童・生徒が伝え合う喜びを感じ他者との豊かな関わりが求められるように、集団での活動の中で、校内研究を進める。	幼児・児童・生徒は積極的に自分の思いを表現することや相手の気持ちを推し量ったり理解しようとしたりすることが難しい状況にある。	伝え合う力を高める授業の実践を行う。	朝の会、音楽科、体育科の学習において、伝え合い活動を取り入れるとともに、段階表や評価シートを活用することで、伝え合う力を高める。	日々の実践の中で、段階表や評価シートを活用し、伝え合うことを高めるような指導を意識できた。	B	集団学習の場では、伝えあう力の向上は見られるようになったが、日々の生活の中で汎化できるようにもっと支援を工夫していく。
	(生活安全部) 児童のクラブ活動、生徒の部活動において児童生徒の自主性を高め、その創造力を発揮し、活動を通して豊かに自己表現している。	活動に対する興味・関心は高いが、教員の指導に頼りがちで十分に自主性を発揮しているとは言えない。活動に自分なりの工夫の部分を増やしていく必要がある。	活動における児童・生徒の自主性が高まり、豊かに自己表現している。	児童・生徒との話し合いを通じてクラブ・部として、また個人としての目標・課題を明確にすることで意欲的に活動に取り組めるようにする。	小学部のクラブ活動、中高等部での部活動への参加を通して主体的な自己表現への意欲が高まっているが、努力の積み重ねが結果に直結しないことに悩む生徒もいる。	B	児童・生徒の心情に配慮し、よいところを認め、クラブや部活動における技術の習得やチームワークの向上に関する助言をする。
	(生活安全部) 児童会・生徒会において児童・生徒が計画に基づいて見通しを持って活動しているように支援する。	児童会・生徒会役員になった児童・生徒においてはその責任を果たそうとしているが、話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていくことが難しい。	児童・生徒が計画に基づいて積極的に児童会・生徒会を運営しようとしている。	児童会・生徒会の年間計画を作成し、役員の児童生徒を中心に話し合いの進め方、活動の準備等に関する助言や支援を行う。	児童会・生徒会で児童生徒の自主的かつ積極的に活動している。一方で生徒間のコミュニケーションが十分でない面がある。	B	児童会・生徒会における主体的な話し合いの機会を設定したり、適切な役割分担ができるように支援したりする。

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%) C:変化の兆し(60%) D:まだ不十分(40%) E:目標・方策の見直し(30%以下)

